IV-JAPAN

NEWS【NO.24】2015.7.31 発行

―目　次―

1～5…ネパール大地震支援事業、木工職業訓練　6…草の根パートナー職業訓練、千客万来
7…奨学金ドナー紹介　8～9…理事紹介　10…幸子のラオス便り　11…国内活動
12…お知らせ、寄付者一覧

ネパール中部地震被災者支援事業

2015 年 4 月 25 日（土）にネパールのゴルカ郡を震源としてマグニチュード 7.8 の地震が発生しました。続く 5 月 12 日（火）にはドラカ郡を震源としてマグニチュード 7.3 の余震が発生し、ネパール中部地域において死者 8,219 人、負傷者 20,630 人を出し、被災者数は 800 万人、避難者数は 280 万人を超える甚大な被害をもたらしました。家屋の倒壊は全壊 479,981 軒、半壊 264,768 軒に上りました（5 月 13 日時点）。最も被害の大きかった地域はシンドゥパルチョーク郡、ゴルカ郡で 90%の家屋が倒壊したと報告されています。

当会では 4 月 25 日の地震発生直後から震源に近いゴルカ郡のタクマズラクリボット村（701 世帯、4,500 人）にあるスリマヒラジャガラン女性信用組合（以下、組合）と連絡を取り合い、村の被災状況や住民のニーズについて情報収集をするとともに、支援金の募集を始めました。皆様からの支援金とあわせ、ネパール中部地震の被災者支援を目的にジャパンプラットフォームの助成を受け、2015 年 5 月 24 日から 6 月 21 日まで当会ラオス事務所から須田裕美とビナ・グルンの 2 名を緊急援助チームとしてネパールに派遣し、支援物資の配布を実施しました。（ジャパンプラットフォームについては 5 ページ目に記載）

ネパール現地事務所設置！5 月 24 日（日）

ラオスを出発した私たちは 25 日（月）午後 12 時半ごろネパールの首都カトマンズに入りました。カトマンズは以前と打って変わって街中には、人も、行き交う車の数もとても少なくなっていました。地震発生後カトマンズに住んでいた人たちは、それぞれの出身地へ一時的に帰っていたそうです。市内の被害は想像していたよりも小さく拍子抜けしたのと同時に混乱もなく安堵感を抱きました。しかし、のんびりしている時間はなく、

27 日（水）には当会が支援対象としているタクマズラクリボット村に行かなくてはなりません。大急ぎで、滞在先ホテルに臨時事務所を設置、日本からの送金のための銀行口座を開設、現地スタッフを２名雇用しました。ネパールには世界中から多くの救援金と救援団体が集まっており、政府は国際団体が自由に救援金を使って活動することにとても敏感になっていました。救援目的の送金は自動的にネパール首相府の口座に自動転送されるという首相布令が発表されたばかりで、支援に入っていた他の日本の NGO は突然口座凍結を銀行から言い渡されたりするなど事業実施が危うくなる情報が飛びかっていました。私たちは現地の知人の助言に従って、職員の個人口座として開設するなど工夫をし、皆様からの支援金を無事に受け取ることができました。

いざ村へ。村の被災状況は…5 月 27 日（水）

早朝私たちは村に向けて出発しました。村のあるゴルカ郡へはカトマンズから西に向かい舗装された山道を約４時間ほど走ります。そこから未舗装の凸凹山道へ入ります。車窓からはすぐ下を流れる川が見えますがもちろんガードレールなんてものはありません。車の中で揺られるというよりも上下左右にポップコーンのように跳ねながら、ひやひや「まだ着かないの？」を何度も繰り返し凸凹道を２時間半かけてようやく村のふもとに到着しました。村のふもとには川が流れており、この川を渡らないと村には行けません。地震のあとから川の水位が上がり、車では渡れなくなっていました。村からトラクターを呼び、川を渡り山道を１時間半かけて登りました。これが本当に大変でトラクターの荷台は山道を進むたびに跳ね上がります。皆、荷台から振り落とされないようにしがみつき、普段は使わない筋肉を使ったので、翌日筋肉痛になったことは言うまでもありません。途中ゴルカ郡庁で打ち合わせもありましたので、村についたときには夜９時をまわっておりあたりは真っ暗でしたが、村人たちは私たちの到着をずっと待っていてくれました。ビナさんも私もトラクターに乗ったのも初めてでしたが、まさか移動手段として乗ることになるとは想像もしておらず、この１日でどんなアミューズメントパークでも味わえないスリリングな体験をしました。

家の中は瓦礫だらけ

翌朝、5 時頃から村の女性たちが家事をする音で目が覚めました。昨日は真っ暗で何も見えなかったですが、徐々に村の全貌が明らかになっていくたびに胸が痛みました。村では幸いにも亡くなった人はいませんでしたが、水牛や山羊といった家畜を亡くしてしまった家がいくつかありました。ざっと村を巡回して判った家屋の倒壊状況としては全壊が 30%、大規模半壊が 60%、半壊が 10%でした。ネパールの家はほとんどが石を積み重ね、土で隙間を埋める造りになっており、耐震強度は弱く、揺れによりガラガラと崩れ落ちてしまった家がほとんどでした。ネパールの家の壁は人の身体ほどの幅があり分厚いため、かろうじて倒れずに建っている家でも、家の中は崩れ落ちた壁や天井の瓦礫だらけで住める状態になく、また、家の骨組みとなる柱というものがなくすべて石と土の壁でできているため、崩れずに建っている家でも壁が傾いてしまっていては修復不可能で、再建のためには結局のところすべてを壊して一から立て直さなければならないという状態でした。

村の人たちは地震発生後２週間程で他の国際 NGO から配布されたターポリンという厚いビニルシートでテントをつくり、瓦礫に埋もれた食料や衣服などを掘りだして生活していましたが、地震直後に雨が降りほとんどの埋もれた備蓄食糧は食べられなくなり、生活必需品は使えなくなってしまいました。幸い畑への被害はなく、村は水もふんだんにある地域だったため食糧の心配はありませんでしたが、ネパールは夏真っ盛りで気温の上昇とともに蝿や蚊が増加し衛生環境が悪化していました。私たちは組合の女性たちと話し合い、刻々と変化する村のニーズに合わせて、当初予定していた毛布とマットレスを変更し、各家庭に蚊帳２枚、洗濯石けん３ダース、タオル３枚、カーペットとしても使えるフェルトの毛布１枚を配布することに決めました。

村人の生活するテント。衣食住すべてこの下で

全壊の家

雨季はもう目の前に迫っていました。雨がふったら凸凹の山道を通って村に来ることはできませんし、土砂崩れの危険性も高まります。私たちは焦る気持ちを抑えながら、当初のスケジュールを大幅に前倒しにして、支援物資調達のために大急ぎでカトマンズに戻りました。

支援物資の調達…順調に進んでいると思ったら最後の最後にハプニング！6 月 3 日（水）

カトマンズに戻るとすぐに物資調達を開始しました。現地スタッフのナビンとスマンが事前に価格調査をしてくれていたので、物資調達先や運送業者はすぐに見つかりました。卸問屋の人たちも協力的で、6 月 4 日（木）の早朝出発に合わせて、物資をトラックに積むのも終盤に差し掛かったころのことでした。午後 6 時半頃になって蚊帳の卸売業者から電話が入り、発注数をすべて用意できないと言うのです。「なぜ、こんな時間に！！」と私たちは業者に対して思いましたが、腹を立てている暇はありませんでした。市場は夜 7 時過ぎにはほとんど閉店してしまいます。出発は明朝。ピンチです。ナビンが慌てて市場に舞い戻り、卸問屋を駆けずり回り不足分をかき集め、なんとか必要数を確保することができました。こんな時にも臨機応変に対応してくれる現地スタッフには本当に感謝です。すべての物資をトラックに積み終えた頃にはもう真っ暗でした。ホッと一安心と思い、お昼にヨーグルトを食べてからお腹の調子が良好ではなかった私は運送会社のお手洗を借りることにしました。用を済ませてトラックまで戻ろうとすると、スタッフが私のところに駆け寄り「須田さん、こっちに来ちゃダメ！」と小声で言うのです。異様な事態を察した私は慌てて停められていた車の影に隠れスタッフに事情を尋ねました。ネパール武装警察が検問に来ているというのです。その頃、ネパール政府は国際団体による救援活動に非常に敏感になっており、送金の自動転送の問題だけでなく、国際団体が被災者に対して直接支援をすることを禁止し、従わなかった場合は逮捕するなど様々なニュースが流れていました。私たちはきちんとゴルカ郡の行政と支援活動について調整・合意の上活動をしていましたので問題はないはずでしたが、予断は許しませんでした。他の国際団体の支援活動に関わっていた運送会社からも様々な情報が入っており、ある場所では目的としていた村に行く前に現地政府によって支援物資を没収されたり、目的としていた村には既に支援が入っているから自分たちの村に支援物資を持っていけと別の村の住民とトラブルになり、あえなくカトマンズに引き返すなど、苦戦を強いられている団体も多くあったようです。こういった情報を事前に入手していたため、私たちはトラックに積載した支援物資は当会のものではなく海外生活の長いビナさんが個人的に購入したものでビナさんの出身村に届けにいくところであると予め口裏を合わせておいたので、武装警察が検問に来たときにも焦ることなく対応できました。苦労して調達した村の人たちのための支援物資を武装警察に取り上げられるわけにはいきませんでしたので、外国人である私がそこに現れるわけにはいかなかったのです。ビナさんが上手く立ち回ってくれたので、武装警察をかわすことができました。後から「本当にタイミングよくトイレに行ってくれたよね」と皆に言われ、昼間に食べたヨーグルトを出したレストランの店主のことを恨んでいた私は逆に感謝しなければいけなくなりました。

物資ともに村に向けて出発！6 月 4 日（木）

朝 4 時半に私たちはトラック 1 台とジープ 1 台でカトマンズを出発しました。物資を積載したトラックはゆっくりしか進めないため、順調にいけば 5 時間で舗装道路の終わりまで到着、それから未舗装の山道を 4 時間で村のふもとの川岸に到着する予定でした。村までの道のりでもいくつか警察の検問があることを知っていた私たちは、運搬物資の領収証を確認される可能性も考え、事前に当会の名前の入った本物の領収証とは別に、ビナさん個人で購入したという偽物の領収証も用意して、何かあったときにはその領収証を見せられるように万全を期して出発しました。幸いパラパラと雨は落ちてくる程度で土砂降りはなく、警察による検問も問題なく通過することができ、トラックの運転手も安全運転ですべては順調に進んでいきました。ところが、もうあと数分で村のふもとの川岸というところまで来て、トラックが先に進めなくなってしまったのです。村では数日前に降雨があり、大きなぬかるみができてしまっていたのです。村の青年たちが助けに来てくれ、皆でぬかるみに石を敷き詰め、道をつくりながらようやく 1 時間かかって脱出し川岸に到着することができました。良かったねと喜んでいる暇はなく川岸についたら早速物資をトラクターに積みなおします。

トラクターに荷物を積みなおしたら川を渡って村へ向かって荷台から振り落とされないようにお互いにしがみつきながら山道を登っていきます。村についたらひとまず村の病院で荷降ろしをして、また、川まで戻ります。トラクター3 台で合計 5 往復。すべての運搬が終わったのはなんと夜中の 12 時をまわっていました。物資調達から運搬までタイトなスケジュールで、一日中歩き回り体力的にもかなり消耗していたので、その日はスタッフ全員石のように眠りました。

みんな心待ちにしていた物資配布　６月５日（金）

バッグに蚊帳をいれてもらい

次は洗濯石けんとカーペット、タオル

最後に受領のサインをします。

休む間もなく物資を村人たちに配布します。村の人たちは支援物資を心待ちにしていたようで、配布会場とした村で唯一の病院に朝からたくさんの人が集まっていました。準備が整ったら村の青年が名簿に従って村人の名前を呼んでいきます。私たちは女性でも持ち帰りやすいように、支援物資と合わせてプラスチックバッグも用意をしておきました。村人は名前を呼ばれたらまずはプラスチックバッグを受け取り、そこに蚊帳、洗濯石けん、カーペット、タオルを順に入れてもらい、最後に受領のサインをします。簡単なように感じられますが実際はそうでもないのです。村の住民台帳には 701 世帯の住民登録があることになっていますが、住民登録があっても実際には住んでいない人や、村に住民登録はないけれども小作農として雇われ長く村に住んでいる人もいます。緊急人道支援をするときにはこういった弱い立場にいる人たちが支援の対象から漏れないように配慮しなければいけません。また、世帯ごとに家族構成人数もバラバラです。組合の女性たちは村人の世帯構成などをよく知っていましたので、彼女達の主体性に任せ、現在村に住んでいるすべての人に公平に物資が行き渡るように、配布数を調整した配布名簿を準備してもらいました。それでもやはり名簿から漏れてしまった世帯が数世帯ありましたが、組合の女性たちをはじめとし村の青年たち、主要政党メンバーやネパール国軍など村人皆の協力により無事に 705 世帯に配布を終えることができました。村の人たちは荷物は頭に担いで、山道を一列になってそれぞれの集落に帰っていきました。山にカラフルなプラスチックバッグと村人の笑顔が広がっていくのを見て、これまでの疲れも吹き飛び清々しい気持ちになりました。

緊急支援から復興へ…

無事に支援物資を村人に届けることができた私たちですが、村人はこれから自分達の生活を立て直していかなくてはなりません。組合の女性たちにこれから自分たちの生活再建のためにどんな活動をしていく予定なのか、そこに当会が支援できることはないか聞いてみました。組合では主にマイクロファイナンス事業を行っており、それによって得られた利益は組合員に還元すると同時に、女性の社会的・経済的自立をサポートするために職業訓練などを独自に実施してきました。しかし、以前に縫製職業訓練を実施してみたものの、政府から派遣されたトレーナーはあまり技術が高くなく訓練生が経済的に自立できるまでは至らなかったということでした。女性たちは職業技術を習得することに関心が高く、自分の力で現金収入を生み出していきたいという強い気持ちを感じました。さらに、私たちが配布した支援物資に対する村人の反応の中でも、「清潔な服を着られるようになって本当に良かった」という声が多く、洗濯石けんに対する評価がとても高かったからなのか、石けんづくりを学びたいという声があがりました。市販されている石けんは高くて現金収入のない貧しい村人たちにはそう頻繁に購入できるものではありません。自分たちで石けんをつくることによって、衛生的な生活が送れるようになり、かつ現金収入も得られるようになります。組合の女性たちと話し合った結果、当会はこれまで培ってきた職業訓練事業の経験を活かし、今後の復興支援として村の女性を対象とした現金収入向上のための石けんづくり職業訓練事業を実施することに決めました。ネパールはこれから雨季に入ります。雨が降ると土砂崩れの危険性も高まるだけでなく、道がぬかるむために村へいくことはできなくなります。復興支援活動を本格的に始めるのは雨季が明けて、農作物の収穫が落ち着く年明け１月頃にし、それまではお互いにできる準備をすることを約束しました。

最後に…

当会には他の国際機関や大きな NGO と比較するとそれほど大きな予算もなく、限られた金銭的・人的資源をいかに活用し最大限に成果を残すことできるかが私たちの使命でした。近隣の村々には支援が届いていることを知っていながら、なかなか支援が届かなかったタクマズラクリボット村の住民たちは当会の物資配布を

本当に喜んでくれ、わざわざ自分の畑で採れた野菜や普段は高価で自分たちはあまり食べない水牛の肉や、飼っていた鶏を絞めて、感謝の気持ちとして私たちのところに持ってきてくれました。大きな国際機関と比べたら私たちにできたのはとても小さなことだったかもしれません。それでも、これほどまでに住民に感謝してもらえたのは、日本と現地で精一杯汗を流してくれたスタッフの活躍や住民の積極的な協力、そして日本からご支援いただいた皆様の善意がなければ成し遂げられなかった事業であったことをここに付記させていただきます。
（ビナ・グルン、須田裕美）

緊急支援チーム
（左から須田、ナビン、ビナ、スマン）

IV－JAPAN は 2014 年度に**ジャパン・プラットホーム（JPF）**へ加盟しました。IV－JAPAN は緊急支援として、2011 年の東日本大震災時に東北 3 県のアジア人被災者への支援、2013 年にフィリピン・セブ島で大型台風による被災者支援を行ってきました。ネパール緊急支援はそうした経験・知識の蓄積を基に、IV-JAPAN は最大規模の緊急支援活動を行った埼玉県内では唯一の団体です。

JPF は、NGO・経済界・政府（外務省）等の主要パートナーが連携して緊急人道支援をサポートする認定 NPO 法人で、2000 年に発足しています。JPF 発足前の状況は、世界で災害や紛争などによって被災者や難民が発生した場合、世界各地から緊急支援団体が駆けつけ、人道支援が行われていました。その主要アクターに NGO が有りますが、日本の NGO は財政基盤が十分でない弱点から、緊急支援を行う準備資金が乏しく、募金受付から始めるため、いつも欧米諸国 NGO に比べて出遅れたり、規模も小さいものでした。そうした状況を官民挙げての取り組みで打破し、オールジャパンで緊急人道支援を行うために、設立されたのが JPF です。加盟 NGO によって 40 以上の国・地域で、980 事業、総額 310 億円の人道支援が行われてきました。

NGO が重要な役割を果たす仕組みであるため、JPF に加盟する NGO には厳しい審査基準があり、また加盟後も助成資格要件として、組織運営、会計、事業実施、説明責任 4 分野の各項目を定期的にクリアーしていかなければなりません。現在、JPF に加盟している NGO は 47 団体で、少数精鋭となっています。この中で、ネパール緊急支援を実施しているのは加盟 13 団体です。IV－JAPAN は 5 月 8 日に JPF へ申請しました。JPF は緊急支援をサポートする組織のため、迅速な承認システムが出来ており、JPF 職員の方々も熱心に対応されて 19 日には承認されました。開発協力事業では考えらえない短期間です。

こうして IV－JAPAN は 5 月 24 日から 6 月 21 日の 29 日間を実施期間として、国際スタッフ 2 名をネパールへ派遣して緊急支援活動を実施し大きな成果を収める事が出来ました。（国内コーディネーター　加藤陽一）

ラオス・ビエンチャン職業訓練（木工）

―JICA 事業・地域経済活性化特別枠―

飯村　浩

早いものであっという間に 2 年次が終了し、4 月 27 日から今年度最初の初級訓練が始まりました。22 名でスタートし、そのうち 8 割が地方出身。中には北部ポンサリー県の山奥から 2 日かけて来たという生徒もいました。早い段階で家庭の事情で 2 名辞め、6 月に 1 人脱落してしまいましたが、その後順調に訓練を進め、先日 7 月 17 日に無事に修了式を迎えました。修了者 19 人中 17 人が他県出身という事で、今後なかなか会うことは難しそうですが、寮でも皆仲良くわきあいあいと過ごしながらの楽しい日々でした。

そして、訓練では今回新たに工場見学を試験的に行いました。午前午後に分かれて訓練生 10 人とトレーナーをバンに乗せ出発。それぞれ 2 つの工場を見学し、皆興味津々。当校には無い初めて見る機械や、流れ作業でどんどん作られていく過程を見られとても良い時間となりました。きっと生徒達も自分が将来働くイメージが出来たのではないかと思います。話は変わりますが、当プロジェクトでは 5 月末付けで前プロジェクトマネージャー（以降 PM）の松本が退任し、7 月 13 日より新 PM 飯村が着任致しました。飯村は昨年度まで行われていたナーサイトン職業訓練校でも PM をやっていたため、経験も豊富で語学も堪能と、とても頼もしい存在です。バタバタの 2 年次が終わり、新 PM を迎え、スタッフ共々気持ちを新たに頑張っていきたいと思います。

（木工インストラクター　山本　奮）

ラオス・ビエンチャン職業訓練（調理・縫製・理美容）

―JICA 草の根パートナー型技術協力事業―

【職業訓練カリキュラムの整備】

トータルで 5 年間の JICA の草の根技術協力事業も 3 年半が経過しました。現在は主に職業訓練のカリキュラム及び教科書の改善・整備・作成を、マネージャーや各分野のトレーナーとともに進めています。現在ヴィエンチャン都教育局の職業訓練センターでは初級 2 ヶ月、中級 3 ヶ月、そして上級 6 ヶ月でトレーニングを行っていますが、これを当事業の中で、3 ヶ月、3 ヶ月、6 ヶ月に改編しようとしています。今回はどうして改編が必要なのか？について簡単に説明します。

ラオスには小学校や中学校などの正規教育（フォーマル教育）の他に、学校制度外教育（ノンフォーマル教育）という制度があり、小学校や中学校に通えなかった、あるいは卒業できなかった等、教育機会に十分に恵まれなかった人々に対して教育機会を提供し、正規教育と同等の資格を与えるものです。当会で支援している職業訓練は、主にノンフォーマル教育制度の中で実施していますが、現在ラオス政府はフォーマルとノンフォーマル教育との間で、互いに単位を認定しあえる制度の整備をすすめています。そして 2014 年に新しく施行されたラオス職業訓練法では、国家認定の「初級レベル 1」という卒業認定証を得るには最低 3 ヶ月の訓練期間が必要だと定められています。さらに、そのひとつ上の「初級レベル 2」の卒業認定証を得るには最低 1 年間が必要なのですが、もしすでにレベル 1 の認定証を持っていれば、1 年間という訓練期間のうちの一部が免除される、とされています。つまり、現行の 2 ヶ月間の初級コースだけで卒業する子は、レベル 1 の認定証を得ることはできませんが、これを 3 ヶ月にすればレベル 1 の認定証をもらえ、その後いずれかの教育機関でレベル 2 の認定を発行できるトレーニングに参加する場合は、トレーニング期間が 1 年よりも短くて済むのです。

このような事情のもと、現在スタッフとともにカリキュラム整備に取り組んでいるのですが、7 月 9 日その参考に、労働省の管轄下にあるラオス－韓国技術開発研究所へマネージャー・トレーナーとともに訪問しました。とても広い敷地で、現在全教科あわせて約 1500 名ほどが職業訓練を受講しているとのこと。担当者の方から運営体制やカリキュラム等の説明をしていただき、授業の様子を見学しました。当会のスタッフが今回の訪問から何かしらのアイデアやヒントを得て、当会事業に活かしてくれることを期待しています。（現地調整員：大滝美佳）

韓国技術開発研究所の縫製トレーナーに話を聞く当会スタッフ

千 客 万 来

●4 月 30 日　茗渓学園スタディーツアー

昨年に引き続き、茨城県つくば市の茗渓学園のスタディーツアー（高校生 5 名、引率 2 名）が今年も当会を訪問し、当会の活動紹介後、職業訓練センター上級コース（OJT）を見学。ちょうど東京外国語大学ラオス語学科から光成さんがラオス事務所でインターンをしていた時でしたので彼女にも同席してもらいました。茗渓学園の学生さんたちも年齢が近い光成さんにざっくばらんにラオスについてや大学進学についてなど様々な質問することができました。

●5 月 2 日　株式会社ウォンツ

ストリートチルドレンや貧しい子どもに興味があり、当会の職業訓練プロジェクトについても興味深く見学していただき、OJT レストランもご利用いただきました。

●6 月 8 日　JICA 東京国際センター　NGO 連携課班長　福永　敬様

JICA 本部から、NGO 連携課の福永様が、他団体の案件終了時評価のためのラオス出張の際に、当会事務所にも視察にいらっしゃいました。OJT のレストランでの昼食、そして美容コースではヘアカットもご利用いただき、帰国後、JICA の HP 上で「技術の割には値段が格安で、地元住民も利用していて定着感がありました。」と報告してくださっていました。ご利用ありがとうございました！

●7 月 2～4 日 JICA なんとかしなきゃ！プロジェクトメンバー谷中修吾様

発展途上国の課題を解決するために国際協力の重要性を共有する、JICA の『なんとかしなきゃ！プロジェクト』の企画で、ビジネスクリエイター・谷中修吾さんが当会に来訪されました。OJT マネージャーのトンサイさん、トゥックさんを交えて、ハンドオーバー後の体制や現在の OJT の状況などについて協議して問題点を整理し、7 月 4 日（土）にワークショップを開き、他の参加者らと共にアイデアを交換しながら問題解決・改善のための対策を考えました。

ワークショップの様子

カノック奨学金ドナー紹介

―長年ご協力いただいているドナーの方のお便りをご紹介させていただきます―

石黒　進（神奈川県茅ケ崎市在住）

リヒテンシュタインにて

IV-JAPAN からドナー紹介の原稿を依頼された。改めて考えてみると確かに長いお付き合いになる。「奨学金ばかりでなく運営費にも目を向けてほしい」というアピールに、その通りだと考えて時々協力した。そういう意味では「良いドナー」だったかもしれないと思った。

色々なボランティア活動に協力してきたが、長く続いているのは「カノック奨学金」だけだ。エピソードになるような特別なきっかけや思いがあったわけでもない私が、何か書くとしたら「相性の良さ」と言うことしかないと思う。と言って「手作り感」などと誉めてみても始まらないだろう。

逆に協力が続かなかった例を考えてみた。先ず 1 つ目、援助していた子どもが続けて亡くなり、意欲を失ってしまったことがあった。思えばシエラレオネとかインドネシアとか、かなり危ない国だったからからかな。この団体は正直で「すべて一律額で協力をお願いするが国によってはあまり多額の援助は周囲とのトラブルを招くこともあるので、そういう場合は事務局の判断でかなりの部分を運営費にまわすこともある。」と明確に言っていた。私は信頼することにしたのだが残念だった。2 つ目、これも誰でも知っている国際的な団体だが、しばしば美しいパンフレットを送ってくる。年に 1 度は何と私のネームカードが同封されている。その分子どもにまわしてくれと言うのが正直な気持ちだ。確かに、PR やサービスで協力者を増やすことも大事な活動だ。一概に批判すべきではない。信頼できないとは言わないが何か違う。少なくとも私は好まない。

ただしこれは後付けの理屈かもしれない。ひいきのプロ野球チームと同じで、何となく気に入っているだけなのかなあとも思う。冨永さんがんばってください。引き続き応援しますよ。

田村　福代（埼玉県春日部市在住）

私は、近所の小・中学生対象の英語教室の先生です。冨永さんとは同じ立場で MPI（旧松香フォニックス研究所）の大宮研究会で出会いました。冨永さんは研究会を立ち上げた初代世話人で、私は 3 代目でした。次第にスケールの大きな人だと感じるようになりました。旧大宮市で開催された「世界盆栽大会」のボランティア部の総括として手腕を発揮されました。更に、国際ボランティアの会を作りたいので協力してと研究会のほとんどの方が創立のメンバーになりましたが、残っているのは私ぐらいかもしれません。あれから 30 年のお付き合いです。一緒に活動をとのお誘いがありましたが、活動費を寄付する人になろうと。初回は 6 万円も出し後が続かなくなりました。2 回目からは 1 口にさせていただき、細く長く支えようと決心して今日に至っております。

年々、送られてくるニュースを読んで、会の活動が着実に力をつけ前進し続けていることに拍手を送らせていただきます。

また、冨永さんの活躍は IV ニュースで知ることができますので、この紙面をお借りして私の近況報告をさせていただきます。2010 年大宮研究会を引退し、主人の母も看取り、43 年間の嫁をやり終えました。娘が先に結婚し、今は息子家族と二世帯住宅で暮らしています。今時珍しいかも知れませんが、中々うまくやってます。今は 4 人の孫に恵まれ、孫たちの英語教室が始まっています。更に、自分の健康のために始めた「気功」は 16 年目に入り、今や指導者として公民館でクラスを 2 つ持って、共に年を重ねる活動もしております。

どの写真も素敵な笑顔でご苦労を見せない冨永さん、代表として貫禄十分です。ただお互い無理の効かない年代になりましたので、お身体に気をつけられて益々グローバルなご活躍を！私も地域で頑張ります。

そして最後に、全スタッフの皆さまのご健康を祈っております。

理事紹介：伊藤裕子

文京学院大学教授伊藤裕子氏は 1992 年より当会奨学金ドナーとして長きに亘りご協力いただいております。また 2013 年からは当会理事をお引受けくださいました。過去の IVNEWS でもご紹介いたしましたが、当会への度々の多額のご寄付により学校建設、訓練所建設等が実施できました。感謝！

職業訓練所開所式（左から 2 人目伊藤裕子氏）

IV-JAPAN の存在を知ったのは、確か 1992 年だったと思います。朝日新聞のコラムに「カノック奨学金」が取り上げられ、タイとラオスの子どもたちへの支援と活動が紹介されていました。仕事はしていましたが、当時まだ子どもも小さく、自分ができる範囲で何らかのお手伝いができればと思い、奨学金ドナーとなりました。

何年か前から、子どもが家を出て子育ても仕上がり、そして自身の引退が見えてきた頃、直接的に「社会貢献」できることを考えました。ラオスで冨永さんが活躍していることを思い出し、直接活動することはできなくても、間接的に援助することは可能だと思いました。また自分の勤め先で「海外フィールドワーク」という授業があり、ラオス事務所で学生が経験を積ませてもらうことが可能だと思ったのです。冨永さんに“のせられて”いつの間にか理事になりましたが、たいして役に立てていないことは自覚しています。働いている間は金銭を、退職後は労力を、と考えている次第です。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

私の専門は発達心理学です。現在はもっぱら**「夫婦関係の専門家」**とみられていますが、基本はジェンダー、つまり女性と男性の社会的役割、もっとわかりやすく言えば女と男の関係についてです。当初は青年期の女子について、職業達成や生き方に親や周囲の期待がどのように影響しているかを研究していましたが、自分のライフサイクルとシンクロナイズして、子育て期、中年期、そして今は中高年期へと関心が移っています。

日本ではあまり夫婦関係を研究する人がいないようなので、最近は雑誌の取材やテレビ・ラジオのコメントが増えてきました。「私は臨床家ではないので、個別の夫婦関係にお応えすることはできません」と言っています。先日も「家族相談士養成講座」の講師を務めた折、自分が書いた『夫婦関係と心理的健康』という本を「論文集なので、読み物ではないから読みにくいです！」と紹介し、あまりの正直ぶりに失笑を買いました。

「働き方がもっと柔軟になれば、女性も就業しやすくなるのに…」と 30 年前に思っていたことが、構造改革の中で、女性のみならず男性も非正社員化し、働く人が長時間労働と低賃金にあえぐ厳しい状況に置かれていることを今は憂いています。

―学校建設・職業訓練所建設―

2012 年に、ヴィエンチャン都に今の IV-JAPAN 事務所がある「ミズキ職業訓練センター」を建設したのが始まりです。昨年 2014 年には、以前からの懸案であった（と聞いている）シェンクアンの「ユウコ職業訓練センター」を埼玉県国際交流協会の援助も得て建設することができました。そこは、午前中は学校制度外教育の高校課程で、中卒の若い兵士が学び、午後から 2 時間職業訓練を受けるというものです。職業訓練時間も高卒の単位にカウントされますので、全員参加ですが、村へ帰ったら起業したいと男性も縫製や調理を熱心に学んでいました。ハンドオーバーの式典の時にはスコールに見舞われ、慌てて教室内に入り、初めて体験するバーシ―（お祭りやお祝いのときに、村の重鎮がお祈りを捧げ、寄進者に幸運をもたらすという糸を皆が次々に巻いていく）に、正直恐れおののいていました。右手にも左手にもぐるぐると巻かれた糸は、ミサンガと同じで、自然に切れて取れるまでほっておくというのです。今年、現地を再訪し、調理・縫製・美容のいずれのコースも順調に進んでいることを聞き、一安心いたしました。

今年はシェンクアンのナディシダ村に幼稚園を建設するということでした。やはり別の方が援助する予定だったそうですが、都合でできなくなったのでその代わりを務めた次第です。「何で幼稚園？」と思ったのも正直あります。「教育を充実させたい、学齢以前の幼稚園教育を！」ということで、村では3キロの隣村の幼稚園まで子どもが通えないそうです。ある程度豊かな国なら、親が車やバイク・自転車で子どもを送迎するところでしょうが、何せ山奥の辺鄙なところ、子どもも徒歩で行くしかありません。村に幼稚園ができて、親は安心して畑仕事に専念できます。きっと親と子が一番喜んでいたことでしょう。村出身の教育副大臣も式典に出席し、村人はその方を我らの誇りとばかりに称え、村には小学校もないので、これからもますます教育に力を入れていくと言っていました。

シェンクアン職業訓練所

ナディシダ幼稚園完成式典に集まった300人余の村民

ナディシダ幼稚園全景

＊＊

母（伊藤裕子）とシェンクアーン訪問　　―サッカー交流―

サッカーを通して、少しでもラオスの役に立てないか。これが、以前から抱いていた私の想いである。二度目のラオス訪問。現在所属する筑波大学大学院ではサッカーコーチの活動と研究の合間を縫って、スポーツを通じた国際協力の授業も受講している。私、伊藤瑞希がラオスを初めて訪問したのは2012年。その時もボールの寄付を行ったが、今よりも無知だったのを記憶している。つまり、それは、〝ただ、物資を寄付すれば、相手は喜ぶ〟という感覚だ。今回も企業から協力を得て、ボールを寄付させて頂いた。しかし、言葉も通じない子どもたちとボール一つで繋がることが、田園風景の広がる村で証明できた。スポーツには〝する〟〝観る〟〝支える〟という側面があるが、確かにその場には、〝サッカーを楽しむ子ども〝それを観て楽しむ子どもや大人〟〝環境を提供してくれたIV-JAPAN〟が存在していた。今回、私が学んだのは、ボールの寄付はもちろん重要だが、それを、〝どこに送り〟〝誰が活用し〟〝継続できるか〟である。最後に、いつも母をサポートしてくれている冨永代表、IV-JAPANのスタッフの方々、そして、現地サポートとしてラオス人の視点で多くの対話をしてくれたPhetdavanh Sounthonnavong。また、今回も鞄持ちという至極重要な任務を与えてくれた母、伊藤裕子に感謝している。　　（IV-JAPAN 元ユース代表/筑波大学大学院　伊藤瑞希）

幸子のラオス便り No.30

ラオス人と外国人の国際結婚は手続きに１年余もかかる

今日はラオスの国際結婚についてご紹介したいと思います。

実は当会の日本人職員がラオス人と５月に結婚しました。彼女はまだラオスに来て３年半しかたちませんが、来てすぐに巡り合ったラオスの男性と結婚を決意してから、というより、プロポーズをされてから、結婚手続きに１年もかかりました。ラオスでは外国人との結婚許可を得るにはだいたい１年くらいかかります。

まず手順ですが、

（１） 必要な書類をそろえる。

【ラオス人】

①婚約証明書；婚約式の後、両親、親戚、村長、友人等の４名程度の承認のサインが必要。

②住所証明書　③独身証明書　④履歴書　⑤健康診断書　⑥写真　⑦ID カード（身分証明書）コピー

【日本人】全て英訳かラオス語訳が必要

①戸籍謄本と抄本　②犯罪経歴証明書　③履歴書　④在職証明書

⑤財産証明書（これは銀行残高数十万円でＯＫ）　⑥健康診断書　⑦写真　⑧パスポートのコピー

⑨婚姻要件具備証明書（つまり独身証明書）

（２） ラオス伝統婚約式；男性側からの結納（ゴールドやお金）、それを参加者がお金を数えて確かめ、間違いないと確認してから、婚約証明書に皆がサインする。村長や村の長老の参加が不可欠。

（３） 以上の書類を役所に提出、外国人はほとんど結婚手続き代行業者に 20 万円前後を払って依頼するようです。

（４） 役所の面接：県によって違うようですが、6 ヶ月後くらいに突然面接日が指定されて、警察署だったり、治安維持事務所での面接が行われます。これがとてもラオスらしいのですが、①まず本人確認のためか、子どものころからの履歴を尋ねられ、説明します。②2 人の馴れ初めから、結婚を決心するまでの経緯、偽装結婚ではないかの判断　③日本人ならプライバシーの侵害と最も思う質問が、セックスをしたか、もしハイと答えたら、数 10 万円の罰金を取られたとのうわさもあり、ナイと答えるのが無難。ラオスでは姦通罪があるのでご注意

④最後の質問は、夫婦として一生添い遂げるか

この面接日に既にお腹が大きく、替え玉で臨んだ日本人もいますが、写真と顔が違ってもばれなかったとのこと

ベトナム人の花嫁

（５） 面接から約 6 か月後に、役所から結婚許可が出る

（６） ようやく、市長か県知事（代理）の前で結婚調印式を行う

（７） 約１か月後に結婚証明書が発給されて、晴れて結婚が成立する

（８） 日本大使館に婚姻届けを提出

こんな面倒な手続きがあるなら、日本で入籍する方が簡単と思うのは私ばかりではありませんが、何と外国で入籍したら、ラオスでは婚姻証明が取れないとのことです。

ラオス人同士の結婚は届け出をしない人が多く、伝統式結婚式（バーシー）をして親戚や村の人たちを招待すれば、社会的に認知され、問題ないようです。結婚しても夫の苗字を使用しない妻もいて、おおらかです。何人もの国際結婚組にお聞きしたのですが、人により様々で、ラオス人の奥さんがマッサージ業を営んでいて、お客さんに警察署長がいたので、申請して翌日結婚許可が出たとか、数か月で許可が出たとか、本当に人様々です。

一生一代の厚化粧を施した
ラオス人の花嫁

余談ですが、結婚した職員は、ヴィエンチャン市庁舎で結婚宣誓をしてすぐに、ネパール地震の救援活動で当会ラオス事務所からネパール人職員と一緒にネパールへ派遣されました。

国　内　活　動

板橋グリーンフェスタ―アウトドアでエスニックごはん―

叔母がIV-JAPANの代表だったことがきかっけで始めたカノック奨学金ドナー。始めてから既に20年以上が経ちますが、念願かない昨年夏に家族揃って初のラオス旅行が実現し、ラオスがより身近な国となりました。

そんな中、私が勤務する東京都板橋区役所で毎年開催しているグリーンフェスタというイベントの企画に関わることに！

グリーンフェスタは23区唯一の屋外型植物園である区立赤塚植物園で、緑に親しんでもらおうと毎年開催しているイベントですが、駅から遠くかつ目立たない所にあるため、いかに多くの方に知ってもらい訪れてもらえるかが課題で、企画会議でも注目される仕掛けが必要との結論に至りました。

アウトドア派の私としては、手入れの行き届いた屋外型植物園→新緑あふれる中で美味しい料理！→外で楽しく気軽に食べられるエスニック料理！→先日訪れたベトナム、ラオス、タイ料理！ということになり、縁あって叔母の友人に紹介していただき出店が実現しました。

また、IV-JAPANにもラオスの小物販売をしていただいたおかげで、色鮮やかで盛り上がるイベントとなりました。ご来場いただいた若い方からお年寄りの方々までエスニック料理を堪能されていた姿と、曲に合わせて踊りながらノリノリで料理販売していたラオス人留学生の陽気さがとても印象的でした！

ご尽力いただいた木村智恵さん、IV-JAPAN日本事務局総括の荻野有子さん、冨永代表はじめ、ご協力いただいた皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

（東京都目黒区　河島　一郎）

＜アジア理解講座＞　第１回　ラオス料理教室（6月7日）

❀講師：ラオス留学生・チッキさんより❀

こんにちは。私はラオスからの留学生チッキと申します。ボランティアで日本人にラオス料理（カオソーイ）を教えました。この料理はラオスで結構有名な料理です。少し辛めにすればもっとおいしくなります。つまり料理の辛めは特徴なのです。健康の為に様々な野菜を使って料理を作ります。本当に体にいいですよ。しかも、文化交流をしながら食事をします。もし、今度興味があったらぜひ参加してください。私達と一緒に美味しい料理を作って食べましょう。皆様を待っております。

―参加者の声―

☺ 本日、ラオス料理教室でお世話になりました斉藤です。カオソーイ、ソーセージ、もち米どれもとってもおいしかったです。なにより、オレンさんとチッキさんがとてもしっかりされていてそれでいて本当にかわいく、色々なお話もできて楽しいひとときでした。
チッキさんにバンビエンのステキな写真を見せていただけ嬉しかったです！旅行がますます楽しみになりました。企画準備等ありがとうございました。　（斉藤稚子）

☺ 先日はラオ・ソーセージやパクチー、カオニャオウなど貴重な食材をお持ちいただきありがとうございました。お陰さまでとても楽しく過ごせ、皆様ともお知り合いになることができました。以上、お礼とご連絡まで。　（渡邉ひな子）

～お　知　ら　せ～

●『ＮＨＫラジオ深夜便』IV-JAPAN 代表・冨永がリポーターとなって 2012 年から始まり早 5 年目を迎えます。まだお聴きになられたことのない方は深夜ではありますが、是非ダイヤルを合わせてみてください。

放送日　　9 月 19 日（土）0 時 10 分頃　「ビエンチャンの賃貸事情について」

●**第 3 回アジア理解講座　　—ラオス難民の 40 年の軌跡—**

日時：10 月 6 日（火）　15 時～16 時半　　場所：さいたま市立生涯学習総合センター　7F 講座室

講師：　ブンロム　ブンヤサイシ

参加希望の方は IV-JAPAN 日本事務局（下記記載）までご連絡ください。お待ちしております。

ご協力ありがとうございました!!

—順不同・敬称略—

♡♡カノック奨学金ドナー紹介 ♡♡（2015/4/1 から 2015/7/31 まで）

五十嵐香苗（2 口）、中村英一、土屋多賀子、渡久地澄子（5 口）、太田榮次（2 口）、小松文子、岩月優子
James A Cummings、田村福代、和田冶江、山口愛子、謝花恵子（2 口）、新井良夫、佐藤美津子（4 口）、富井伊都子
河口道子、岡庭史子（2 口）、河島一郎

❤運営・プロジェクト費寄付者一覧❤

（2015/4/1 から 2015/7/31 まで。5,000 円未満は省略させて頂きます。ご了承下さい。）

五十嵐香苗（6 千円）、北條鎮雄（5 千円）、栗林　聡（10 万円）、渡名喜よし子（5 千円）、上田義朗（5 千円）
イチカワ北海食品（1 万円）、冨永幸子（7 万円）、　株式会社ウォンツ（1 万円）、入江利恵子（1 万円）
田中兄一（5 千円）、生駒和夫（10 万円）、コペニカ（4 万円）、バンサトリー（1 万 3,361 円）
JANIC/NGO サポート募金（5 千 442 円）、HIS ラオス（7 千円）

💗ネパール地震寄付者💗

JANIC/NGO サポート募金（35 万 3,375 円、）豊田利久（1 万円）、甲斐信好（2 万円）、伊藤裕子（3 万円）
吉野貴美子（10 万円）、秋本奈緒（10 万円）、横田順子（2 万円）、斎藤加代（5 万円）、須田裕美（5 万円）
加藤陽一（15 万円）、金子玲子（5 千円）、飯村　浩（1 万円）、河合明弘（10 万円）

＜編集後記＞

冨永代表は年数回日本へ帰国しますが、その都度、手際よく調理したラオス料理をスタッフや関係者にふるまってくれます。ラオスの食材を持参できる時もありますが、事務所近くの良心的な八百屋さんで調達した日本野菜が、あら不思議ラオスの香りいっぱいに変身。日本では馴染みが薄いかもしれませんが、是非一度機会があれば味わっていただきたいなと思います。（写真は“ラープ”（ひき肉の香草炒め）もち米と一緒にいただきます）

ところでこの猛暑、酷暑、湯船に浸かっているような毎日、老若男女身にこたえます。自分の体をすっぽりと、行く先々についてくる冷たいバリアが欲しいと思う今日この頃です。（事務局　井藤）

＜随時会員を募集しています＞

奨学金ドナー及び国際協力費・運営費ドナーを随時募集しています。一人でも多くの皆様のご協力を宜しくお願い致します

① 奨学金ドナー　　年 1 口　**12,000 円以上**
② 国際協力費又は運営費ドナー　　★個人　年 1 口　3,000 円以上　　★団体及び法人　年 1 口　10,000 円以上

・申込方法（銀行振込の場合は振込された方の氏名と会員番号の下 4 桁の明記をお願い致します）

郵便振替　：（口座番号）　00140-5-537168　**（加入者名）IV-JAPAN**
銀行振込　：埼玉りそな銀行浦和中央支店　（※銀行振込の方は事務局までご住所等詳細をお知らせください。）
（普通）　口座番号:5038052　　名義人：（特非）国際協力 NGO・IV－JAPAN

認定・埼玉県指定　特定非営利活動法人　国際協力 NGO・IV-JAPAN

日本事務所
開所時間 午前 10 時～午後 6 時
〒330-0856　埼玉県さいたま市大宮区三橋 2-545-2
シティヒルズ 101
TEL:048-622-8612　FAX:048-622-8612
E-mail: iv-japan@vanilla.ocn.ne.jp
http://iv-japan.wix.com/iv-japan

ラオス事務所
P.O Box7920 Vientaine, Lao PDR
TEL/FAX ： +856-21-316047
携帯電話；+856-20-55515122
E-mail: ivjapan.vte@gmail.com

タイ事務所
Continental Mansion 34/7 Soi Lertpanya
(Ra Bangkok 10400 Thailand
E-mail: valaikorn@hotmail.com

（IV-JAPAN QR コード）　（アカウンタービリティセルフチェックマーク）